国際日本研究センター
International Center for Japanese Studies

NEWS LETTER
ニューズレター
東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies
http://www.tufs.ac.jp/common/icjs
2016.10 No. 19

●夏季セミナー 2016・サマースクール院生発表会 報告 Report Summer Seminar, PhD Students Workshop 2016 …… 1
●『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 18 回研究会 “Contrastive Study for Japanese and Other Languages” The 18th Research Seminar …… 1-2
●『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 19 回研究会 “Contrastive Study for Japanese and Other Languages” The 19th Research Seminar …… 2-3
●中国における日本語教育事情―中国赴日本国留学生予備学校の基礎日本語教育―“Japanese Education in China: Basic Japanese Education at Preparatory Schools for Chinese Students to Japan” … 3
●比較日本文化部門<国際日本研究の可能性>―ドイツ護憲の日本研究の視点から
“The Possibilities for International Japan Studies – from the Perspective of Japan Studies in German speaking countries” …… 4
●国際日本語教育部門「文法・語用と教育シリーズ第 5 回研究会」“Grammar, Pragmatics and Education Series” The 5th Workshop …… 4-5
●2016 年活動報告（2016 年 3 月～ 9 月）Activity Report (Mar.-Sep.2016) …… 5-6
●お知らせ NOTICE …… 6

夏季セミナー 2016・サマースクール院生発表会　報告
Report : Summer Seminar, PhD Students Workshop 2016

7月19日（火）から21日（金）までの3日間、夏季セミナー2016「言語・文学・社会―国際日本研究の試み」が開催されました。国際日本研究センターが主催するこの夏季セミナーは今年で5回目を迎え、国内外から多くの参加者が集いました。

セミナーでは、海外の諸大学で日本語研究、日本の文化・社会研究を牽引する第一線の講師10名（タイ・シンガポール・韓国・中国・台湾）と受入れ中の博報財団の研究者（タイ）を迎え、センター教員を中心とする講師陣とともに、充実した講義が行われました。

さらに、サマースクール研究発表会も同時開催されました。日本で学ぶ大学院生28名、講師の方々とともに来日したタマサート大学（タイ）・シンガポール国立大学・韓国外国語大学校・中央大学校（韓国）・北京外国語大学・東海大学（台湾）・国立台湾大学・国立政治大学の大学院生14名に加え、開南大学（台湾）の大学院生も参加しました。国内からは本学の大学院生のほか、ISEP生（厦門大学）、筑波大学、国際基督教大学の大学院生も研究発表を行いました。この報告者43名にのぼるワークショップも今年で4回目を迎え、報告後は活発な質疑応答がなされました。

その後の大学院生の懇親会には90名ほどが参加し、会場のあちこちで人の輪が出来、今後、国際日本研究を担っていく若手研究者同士が親しく交流しました。また、会場を移して、海外の講師を囲み、熱心な議論と歓談の場がもたれました。

セミナーの延べ参加者数は14コマで約660名、4会場で行われた大学院生によるサマースクール研究発表会の参加者も延べ約640名にのぼりました。最終日にはサマースクール修了式も執り行われ、海外から参加した大学院生に修了書が手渡されました。ガレリアでの記念撮影の後、大学院生たちはそれぞれの場での研鑽と再会を誓い、名残を惜しみつつ帰国の途につきました。

（野本京子）

The 2016 Summer Seminar “Language, Literature, History: A Constructive Approach to International Japanese Studies” took place July 19th-21st, in conjunction with a Summer School with presentations by students from home and abroad.

The summer seminar began in 2012 and is now in its 5th year. Lecturers provided stimulating, detailed presentations on ongoing research in the fields of language, literature and sociology (including education and history). This year also marked the third holding of the Summer School, with 43 graduate students presenting their research. 14 participants attended from universities outside of Japan, and 1 from International Christian University. Both the Summer Seminar and the Summer School featured lively question and answer sessions.

『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 18 回研究会
“Contrastive Study for Japanese and Other Languages” The 18th Research Seminar

●日時：2016 年 3 月 5 日（土）14：00 ～ 17:40
●場所：東京外国語大学　語学研究所（研究講義棟 419 号室）
●発表者・講演者と題目
・浦田和幸氏（東京外国語大学）
研究発表「英和辞典の始まり ― 英語と日本語のはざまで」
・萬宮健策氏（東京外国語大学）
研究発表「インディー語動詞構造再考 ～受動動詞の観点から～」
・下地理則氏（九州大学）
講演「宮崎県椎葉村尾前方言の Differencial Case Marking」

浦田氏は，江戸後期から幕末の社会状況を背景として編纂された初期の英和辞典について概説した。1808（文化5）年のフェートン号事件をきっかけとして長崎のオランダ通詞たちが英語学習を始め，1814（文化 11）年に『諳厄利亜語林大成』（あんげりあごりんたいせい）を完成したのが英和辞典の第一号とされるが，これは幕府が秘蔵し，一般には流布しなかった。

日本の英和辞典の実質的な第一号に当たるのは1862（文久2）年の『英和対訳袖珍辞書』である。蕃書調所教授手伝（後に開成所教授）であったオランダ通詞出身の堀達之助が中心となって，Picardの英蘭辞典を底本に，蘭和辞典や英華字典などを参照しつつ編纂したものである。当時，好評を博し，後にさまざまな人の手になる改訂版が出された。蘭学から英学に移行する時代にあって，英・蘭・和・漢語の間で，苦心して英和辞典が作られた軌跡を辿った。発表ではparachute「気球ニテ降リル時餘速カナルヲ防グ道具」などの興味深い訳語も紹介された。

萬宮氏は，スィンディー語文法においてこれまで十分な記述がなされていなかった受動動詞を中心に動詞構造の考察を行った。(1) -(r)a:-が使役動詞をつくる接辞として機能するように，-iɲ-は受動動詞をつくる接辞としてとらえ直すことができる。(2)スィンディー語の受動文には，元々は「行く」という意味の補助動詞を用いるものと，接辞-iɲ-を用いた受動動詞によるものがあり，両形式に意味の差はない。(3)受動動詞には受動文をつくる用法のほかに，未来命令形としての用法もある。未来命令形とは「その内やってもらう」ことを要求するもので，「今すぐやってもらう」ことを要求する単純命令形と区別される，などを，例文を示しながら説明された。

下地氏は宮崎県椎葉村での調査で収集した345例の他動詞文のデータを資料として，尾前方言における目的語の格交替（Differential Object Marking; DOM）について詳述した。尾前方言には直接目的語を表示する有形の格助詞としてba，oba，oの3形式があり，有形の格標示を欠く「無助詞」— これは全用例の半数近くを占める — も入れた4つの形式の分布を観察すると，(1)P項（<Patient）の有生性と，(2)P項と述語の隣接性が格標示にとって関与的であることがわかるという。

有生性に関しては「1人称>2人称>固有名詞>人間>動物>無生物」という階層を設定し，P項（<Patient）がA項（<Agent）より階層の上位にあるほど有形の助詞で対格標示がされやすく，逆にP項がA項より下位にあるほど無助詞になりやすいという傾向が見られること，また，P項が階層上位にある場合（特に1人称と固有名詞の場合）はbaが顕著に現れることなどの指摘があった。（例文(74)）

(74) oreba sogyaa tomunnai.「俺をそんなに止めるなよ。」(2人称A>1人称P)

隣接性に関しては，例文(77)のようにP項と述語が隣接していない場合 — すなわち，問題の名詞句が目的語であることを明示する必要性が高まると — 有形の格標示になる（無助詞は非隣接の例の6%以下）ということ，また，有形の格表示の中でもoが現れる傾向が強い（非隣接の例の60%）という事実が指摘された。

(76) umaga kusa(ba/oba/o/φ) kwiioru「馬が草を食べている」

(77) umaga kusa(ba/oba/o/*φ) umasooni kwiioru「馬が草をうまそうに食べている」

有生性と隣接性のいずれについても，ある名詞句がP項であるということを示す必要性が，有形の格表示の動機（のひとつ）になっている，という通言語的なDOMの特徴が当てはまるとのことである。なお，言語によっては特定性（specificity）がDOMに関連するとされるが，尾前方言に関しては，特定性は有生性や隣接性ほど関与的ではないという点も指摘された。

日ごろは方言研究にあまり接していない聞き手にとっても大変分かりやすく,言語研究の方法について,多くの示唆に富む講演であった。研究会には学内・学外から約30名が集まり，それぞれの発表・講演に熱心に耳を傾けていた。

（成田節）

URATA Kazuyuki gave an overview of early English-Japanese dictionaries, compiled against the social backdrop of the late Edo Period. MAMIYA Kensaku examined passive verbs and the structure of the passive in Sindhi, which have hitherto received little attention. SHIMOJI Michinori used 345 transitive verb sentences collected in fieldwork in Shiiba, Miyazaki Prefecture as the basis for a detailed examination of differential object marking in the Omae dialect. The presentation was easy for listeners to understand (something often lacking in research on dialects) and thought-provoking. Around 30 attendees from in and outside the university followed the presentations studiously.

『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 19 回研究会

“Contrastive Study for Japanese and Other Languages” The 19th Research Seminar

●日時：2016 年 7 月 9 日（土）14:00 ～ 17:40
●場所：東京外国語大学語学研究所（研究講義棟 419 室）
●発表者・講演者と題目
・谷口龍子氏（東京外国語大学）「「謝罪」研究の切り口」
・根岸雅史氏（東京外国語大学）「日本人は、冠詞に無カンシん?」
・講演　清野智昭氏（千葉大学）「日独語の感情表現の対照」

まず、本学の谷口龍子氏による研究発表「「謝罪」研究の切り口」から始まった。谷口氏は、これまでの「謝罪」に関する言語研究の対象や方法論の変遷を概観したのち、先住民に対する公的謝罪の事例を分析した。これまで謝罪研究は謝罪を行う側の言語行動を中心に、定型表現の種類や使い分け、発話行為、ポライトネスなどの理論研究、ストラテジーや謝罪の動機と表現の使い分けについての実証研究が行われてきが、近年は、謝罪をされる側の対応も含めた「謝罪」談話の分析や、謝罪行為を受ける側の反応や認識に研究の対象が拡がっているという。

また、日本語と比べて謝罪表現が頻繁に使われない中国語の例を挙げ、言語により謝罪表現の使用頻度やストラテジーが異なることが、異文化摩擦の要因となりうる点を指摘した。

さらに、オーストラリアの先住民に対する政府の謝罪が国民や先住民側に好意的に受け入れられたことの要因について、謝罪表現のバリエーション、謝罪表現の使用回数、人称、アスペクトなどの点に注目し、台湾政府による先住民に対する謝罪コメントや北海道庁によるアイヌ民族への謝罪文の例と比較しつつ分析した。

発表後は、謝罪の定義や発話行為理論における捉え方などについてフロアとの質疑応答があった。

次に、本学の根岸雅史氏により「日本人は、冠詞に無カンシん？」と題する発表が行われ、日本人英語学習者にとって習得が難しい冠詞の習得に関する研究の報告がなされた。

最初に、コーパス調査に基づいた英語学習者全般と日本人英語学習者のエラーのタイプが比較され、日本人英語学習者特有の文法的な誤りとして冠詞の脱落がある点が指摘された。また、日本人英語学習者の冠詞エラーには、脱落エラー、余剰エラー、選択エラー等のさまざまなタイプがある点も示され、これらの冠詞エラーについては、比較的習熟度が高い英語学習者にも見られる点が明らかにされた。

さらに、言語を習得する際に、母語が目標言語の学習を干渉するという「対照分析仮説」は現在では弱い主張として採用されているが、本発表では、Hawkins and Buttery (2010) のデータを紹介することで、フランス語、ドイツ語、スペイン語など冠詞が存在する言語の英語学習者に比べて、日本語、トルコ語、韓国語、ロシア語、中国語など冠詞が存在しない言語の英語学習者では、CEFRのレベルが高い学習者でも冠詞の脱落エラーが多い事実が報告された。

最後に、冠詞に関するインプットとしての教科書の役割にするインプットとしての教科書の役割に関する議論がなされた。現在の日本の英語の検定教科書では、冠詞については文法項目ではなく語彙項目として提示されているものが多く、ゼロ冠詞に至っては、指導項目になっていない。

以上のように、現在の日本人英語学習者は、母語における冠詞の不在、冠詞概念の複雑さ、可算不可算の問題、さらには指導の問題等で、冠詞習得に困難な状況がある点が指摘された。

発表後のフロアとの質疑応答では、形式は単純で高頻度でもある冠詞を日本人英語学習者が習得する上での教科書の役割などが議論された。

清野智昭氏（千葉大学）は、「ドイツ語と日本語の感情表現の対照 ― 人称制限現象を中心に―」と題する講演で、ドイツ語の感情表現の例として「喜び」あるいは「うれしさ」を表す3タイプの表現、(I) X ist froh (über Y)〔Xは（Yが）うれしい〕、(II) X freut sich über Y〔XはYを喜んでいる〕、(III) Y freut X〔YはXを喜ばす〕を取り上げ、大規模コーパスの調査に基づいて、(a)ドイツ語に人称制限はないのか、(b)ドイツ語の上記3タイプの表現は感情の表し方に違いがあるのか、(c)ドイツ語と日本語の感情表現はどのように対応するのか、という問題を考察した。要点は以下の通りである。

Y freut X〔YはXを喜ばす〕は、現在形では感情主体Xは1人称が圧倒的に多く、Das freut mich!（うれしい！）のように、基本的には感情の直接的な表出に使用される。3人称は、Er sagt, das freue ihn, wirklich.（彼は、それはうれしい、本当に、と言う）のような引用や、Annemarie wußte immer genau, was Erwachsene freut oder kränkt.（アンネマリーは、何が大人を喜ばすのか傷つけるのかいつもはっきり分かっていた）のような一般論でしか見られない。このように、この構文は日本語の感情形容詞に非常に近い人称制限を持つ。

X freut sich über Y〔XはYを喜んでいる〕は、現在形でも主語Xは1人称より3人称の方が多く、Die Kinder freuen sich über mein (…) Spielzeug,（子どもたちは私の. . . おもちゃに喜んでいる）のように、人が喜んでいることを外面から描写していると考えられる表現が多い。主語Xが1人称の場合も「喜び」は外部から観察可能だが、Wir freuen uns doch immer über netten Besuch!（私たちはいつも良い人が訪ねてくれるのがうれしいんです！）のように「喜び」の描写よりも「喜び」を相手に伝えること自体が発話意図であることが多い。

X ist froh (über Y)〔Xは(Yが)うれしい〕は、現在形では1人称の割合が多いが、3人称も少なくない。3人称が主語として表示されるのは、Bill Gates (…) lehnt sich dann entspannt zurüc, ist froh, dass er nicht die Rollen tauschen muss.（ビル・ゲイツは…リラックスして背もたれに身を預け、役割を交換せずに済んでいることにほっとしている）のように、その人物がほっとしている様子が明らかなときである。つまり、froh は現在形で使用されても、感情の表出機能だけでなく、描写機能をも持つ。

3タイプの相違は、Y freut X が典型的に感情表出に用いられ、人称制限が見られる。一方、X freut sich über Y は外面的に観察可能な感情の描写に用いられる。X ist froh (über Y) はその中間に位置づけられる、というように大きくまとめることができる。

講演後は、共起する一人称が exclusive かどうかの問題、情報構造のレベルでの考察、さらに談話構成での役割などについて、フロアとの活発な議論が行われた。

当日は、学内外の研究者、学生など50名以上の聴衆が参加し、盛会であった。（対照日本語部門）

Lecturer : Ryuko TANIGUCHI(TUFS) 'Some Research Approaches to the Study of Apology', Masashi NEGISHI(TUFS) 'Are Japanese People that Uninterested in Articles?', Tomoaki SEINO (Chiba University) ' Contrastive Study of Expressions of Emotion in Japanese and German'

First, Professor Taniguchi gave a historical outline of the study of Apology expressions. Then, she referred to the frequency of use and strategies of expression of apology. The difference in such frequency and strategies among languages can lead to intercultural friction. In addition, she introduced the styles of apology used by the governments of Australia, Taiwan and Japan. Next, Professor Negishi reported some findings on the acquisition of English articles by Japanese English language learners, who find it difficult to learn them. The reason for this difficulty lies in the absence of such articles in Japanese, the complexity of the concept of articles, the difference in how Japanese and English deal with the plurality concept, and problems concerning teaching methods for foreign languages. Professor Seino presented 3 types of expressions of emotion in German. He used an example of expressions that refer to the feeling of 'delight'. One type is used as a prototype and shows a restriction in the use of pronouns. The second type is used to describe the objectivity of emotions. The third type is found between the two, belonging to neither of the previous types.

中国における日本語教育事情ー中国赴日本国留学生予備学校の基礎日本語教育ー

Report "Japanese Education in China: Basic Japanese Education at Preparatory Schools for Chinese Students to Japan"

●講　師：赤桐敦氏（京都励学国際学院）
　　鈴木美加氏　（東京外国語大学）
●日　時：2016 年 3 月 1 日 (火)　15:00-17:00
●場　所：東京外国語大学 留学生日本語教育センター1F さくらホール

本報告会では、本学留学生日本語教育センターから文科省委託事業として2015年度に中国に派遣され、中国赴日本国留学生予備学校（中国長春市）にて教育にあたった2名の教員により、①日本の大学院博士課程進学予定の学生の抱く日本留学のイメージ及び留学の動機付け要因（赤桐氏）、②中国赴日本国留学生予備教育の実際（鈴木）に関して、データや実践を踏まえた分析による発表がなされた。赤桐氏の報告から、日本留学の選択要因として、人間関係（教員・先輩）やインターネットが重要であり、来日前の日本語学習は留学の誘因となっていることが明示され、鈴木により、本事業が初級から中級終了までの日本・中国双方の連携による1つのモデルとされる効果的な教育プログラムであることが示された。参加者は15名でこじんまりとした会で、質疑応答では発表者と参加者双方の和やかで、時に鋭いやりとりがあり、今後の日本語教育振興にも示唆の得られる会となった。

（鈴木美加）

At this debriefing session, two members of the TUFS Japanese Language Center, who were dispatched as part of a Ministry of Education project in 2015 to TUFS' s study abroad preparatory school in Changchun, China, gave data and practice-based presentations. AKAGIRI Atsushi introduced the images of and motivations for study abroad in Japan expressed by students scheduled to begin master' s programs in Japan. SUZUKI Mika introduced the state of education in Chinese preparatory schools for study abroad in Japan.

比較日本文化部門〈国際日本研究〉の可能性――ドイツ語圏の日本研究の視点から」

The Comparative Japanese Culture Division "The Possibilities for International Japan Studies – from the Perspective of Japan Studies in German speaking countries"

山口氏の報告は、表題のとおり国際日本研究を「外から」、とりわけドイツ語圏の日本研究の視点から検討するものであった。参加者は10名程度であったが、詳細な報告と問題提起に対して、活発な討議が交わされた。

山口氏の報告の構成およびドイツの日本研究の特徴と、「国際日本研究」の課題についてここで報告する。

〈ドイツにおける日本研究〉

i)歴史的概観

国内外の日本研究について、データベースを活用しながら紹介・検討したうえでドイツの日本学については以下の特徴を指摘された。

・17世紀のエンゲルベルト・ケンプファー(Engelbert Kaempfer)、19世紀中葉のシーボルト(Philipp Franz Balthasar von Siebold)といった先駆者ののち、19世紀末に学問的ディシプリンとしての日本学がウィーンとベルリンで生まれる。日本学の教授ポストが初めてできたのはハンブルク大学(1914年)。

・1920年代には、第一次世界大戦の関係を引きずり、外交的理由から日本研究はほとんど展開しない。

・ナチ時代(1933-45)は、枢軸国としての日独の結びつき。レイシズム・ナショナリズム強化の目的もあり、日本学者が比較的増える。神道もドイツ語圏の日本学の中では重要なテーマ。

・第二次世界大戦後、ドイツの日本研究は日本の伝統文化・芸術に集中。(今日でもなおこの方向性は存在する。) 近代以前の日本文化に研究が集中、その方面での重要な貢献。

・古典的「日本学」から現代的な「日本研究」への転換：アメリカでの日本研究の展開にともない、ドイツでの日本研究もあらゆる領域をカバーする実践的研究へと性格を変えてゆく。

戦後の日本学における「パラダイム転換」――アメリカでの敵国としての日本に関する実践的知識の必要性(『菊と刀』!)。それに伴い、近代以前の日本の文献学的研究は後退。この転換は1960年代末のドイツの政治風土とも結びつくとともに、この時期の日本の経済的躍進もこの傾向を助長。

ii) 現在のドイツの日本学の状況：

・制度的名称：「日本学 Japanologie」

「東アジア研究所」「アジア・アフリカ研究所」

・実質的に「日本学」と「日本研究」の混在：研究機関、研究者によって大きく二つのカラーに別れるか。

・ドイツでも「日本学」は低下傾向。さまざまな大学で日本学の統合再編Abwicklungが見られる。

Würzburg, Marburg, Göttingen, (Humboldt-Universität Berlin)

・日本学の教授ポスト：「文化研究」と「社会科学」

以上の紹介のうえで、山口氏は国際日本研究の論点として以下の点を指摘された。

①名称・基本的立場について

・「国際日本学」か、「国際センター」的な機能 (国際的研究協力、研究情報提供) か

・もう一つの名称の問題：Japanologyか、Japanese Studies/Japan Studiesか

②TUFSの国際日本研究の可能性

・現在もすでにさまざまな海外 (とりわけ東アジア) の日本研究機関と連携、サマーセミナーで実績。また、情報発信の蓄積。

・日本研究のあり方を国際的視点からとらえようとするとき、各国で展開した日本研究の歴史、関心、ポストコロニアル的な意味での政治的位置 (酒井直樹)、制度形態を把握する必要がある。それなしに一律に国際的な日本研究の比較を考えることはできないのではないか。

・日本研究における「ずれ」の問題：

海外と日本とのあいだの視点の違いという単純な図式かに収まらない

・それぞれの国、機関において、立場の違いから日本研究に対するさまざまな種類の「ずれ」が生じている。

・文化的先進国において異文化研究 (さらには敵国研究) としての「地域研究Area Studies」が日本を捉える眼差しとかつてヨーロッパを模範として近代化を進める必要があった日本がヨーロッパ・アメリカをとらえる眼差しの非対称性 (酒井直樹)

・従来の (さまざまな立場からの) 「異文化研究」に対して、日本側から外に向けて関わろうとする「国際日本研究」のあいだには、おそらくもともとの日本研究に内在する多層的な「ずれ」によって生じる根本的な「ずれ」がある。

・研究課題としての一つの可能性：個別研究として現れているものは、力のせめぎあいとしての政治的コンテクストからほぼ切り離されたかたちで示される。世界の中で日本研究がどのように展開しつつあるか、そのなかで日本の側からコミットしようとする「日本研究」はどのようなポジションをとることができるのか――さまざまな種類の「ずれ」を可視化する作業のなかで浮き上がってくるのではないか。

・それぞれの地域での日本研究の歴史的経緯、研究・教育制度として現れているものを通じて、個別研究の生産にかかわる力の場のダイナミズムを分析することが問われているだろう。

(友常勉)

The Comparative Japanese Culture Division hosted "The Possibilities for International Japan Studies – from the Perspective of Japan Studies in German speaking countries" . YAMAGUCHI Hiroyuki considered International Japan Studies from an "outside" perspective, in particular from that of German speaking countries. Following an overview of Japan Studies in Germany past and present, he examined issues of TUFS' s name, basic stance and potential for international Japan studies. Around 10 attendees engaged in lively debate over the detailed report and issues raised therein.

国際日本語教育部門「文法・語用と教育シリーズ第5回研究会」

"Grammar, Pragmatics and Education Series" The 5th Workshop

国際日本語教育部門「文法・語用と教育シリーズ第5回研究会」として、本学の交流協定を締結したベルリン自由大学における日本語教育について、城戸寿美子先生 (ベルリン自由大学日本語講師・本学ポルトガル語科卒業) から報告を頂いた。

国際日本語教育部門では、2009年より、交流協定大学であるリーズ大学・北京大学・上海外国語大学との連携で、国際日本語学習者コーパス構築・誤用検索サイト開発プロジェクトと誤用研究を行い、本センターHPの刊行物及びオンライン・リソースにてその成果を公開発信しているが、2016年度より、ベルリン自由大学からも日本語学習者コーパスの提供を受け、日本語習得研究・誤用研究を連携して行うことを予定している。

また、研究発表「相互参照型日本語・英語・中国語学習者コーパス誤用研究からみえる日本語の"無界性(unboundedness)」(東京外国語大学　望月圭子) は、本センターHPオンライン・リソースにて公開している「日本語・英語・中国語学習者コーパス誤用検索サイト」http://ngc2068.tufs.ac.jp/corpus/を用い、相互参照型日本語・英語・中国語学習者誤用コーパスから実証される日本語の「無界性」についての研究発表である。

発表の概要は、日本語母語話者による東外大英語学習者の誤用のうち、「空間概念」を表す前置詞 'in/on/at' 間の誤用に焦点をあて、日本語には、「～内(ナイ)」(車内、機内、学内)、「～の中(なか)」(電車の中、飛行機の中、学校の中)、「～の奥」といった曖昧な空間表現が多いため、AT(点)、ON (平面) といった空間認知の習得が上級英語学習者 (TOEIC800点程度) でもむずかしいこと、「NP1のNP2」構造の影響を受けて、「ofの過剰使用」が卓越し、移動事象の起点を表す" from" や未完結事象に用いられる" for" の習得が困難であることを論じた。また、日本語母語中国学習者コーパスにおける誤用についても、<一個yige>という、完結事象に必要な個体化機能をもつ限定詞(determiner)の非用が卓越しているのに対して、英語母語話者による中国語学習者コーパスにおいては、過剰使用がみられるという対比が観察され、日本語における「無界性」が、言語習得においても影響していることを実証的に論じた。

本発表の内容は、本センターHPの刊行物『日本語学習者の母語・地域性をふまえた日本語教育研究とウェブ辞典構築』(ISSN 2188-5087) に収録されている二論文「『東京外国語大学英語上級学習者コーパス』における前置詞の誤用類型：―日本語母語話者・中国語母語話者英作文の対照」(望月圭子・ローレンス・ニューベリー＝ペイトン)、「英語・中国語からみた日本語の無界性：複合動詞と空間認知」(望月圭子・申亜敏) に詳しい。

(望月圭子)

Following the concluding of an exchange agreement with TUFS, Freie Universität Berlin' s KIDO Sumiko (a TUFS graduate in Portuguese) gave a detailed presentation on the state of Japanese language education at Freie Universität Berlin, including student numbers, curriculum structure and teaching materials. MOCHIZUKI Keiko examined characteristics of Japanese learners of English, Japanese learners of Chinese and English learners of Chinese observed in error corpora, offering empirical arguments that "unboundedness" in Japanese affects language acquisition.

2016年活動報告(2016年3月～9月)　Activity Report(Mar 2016-Sep 2016)

■講演会・ワークショップ等■

●3月1日(火)東京外国語大学 国際日本研究センター主催　報告会
「中国における日本語教育事情—中国赴日本国留学生予備学校の基礎日本語教育—」
赤桐敦氏(京都励学国際学院)、鈴木美加氏(東京外国語大学)

●3月5日(土)東京外国語大学　国際日本研究センター
対照日本語部門主催
『外国語と日本語との対照言語学的研究』第18回研究会
下地理則氏(九州大学)、浦田和幸氏(東京外国語大学)、萬宮健策氏(東京外国語大学)

●5月31日(火)東京外国語大学 国際日本研究センター
比較日本文化部門主催　研究会
「〈国際日本研究〉の可能性—ドイツ語圏の日本研究の視点から」
山口裕之氏(東京外国語大学)

●7月9日(土)　東京外国語大学国際日本研究センター
対照日本語部門主催
『外国語と日本語との対照言語学的研究』第19回研究会
谷口龍子氏(東京外国語大学)、根岸雅史氏(東京外国語大学)、清野智昭氏(千葉大学)

●7月19日-21日(火～木)
国際日本研究センター主催
夏季セミナー2016「言語・文学・社会 —国際日本研究の試み」

※同時開催「サマースクール院生研究発表会」

徐一平氏(北京外国語大学)中国、
趙華敏氏(北京大学)中国、
范淑文氏(国立台湾大学)台湾、
徐翔生氏(国立政治大学)台湾、
蕭幸君氏(東海大学)台湾、
金鍾德氏(韓国外国語大学校)韓国、
尹鎬淑氏(サイバー韓国外国語大学校)韓国、
李吉鎔氏(中央大学校)韓国、
リム ベンチュー氏(シンガポール国立大学)シンガポール、
タサニー メーターピスィット氏(タマサート大学)タイ、
坂本惠氏、柴田勝二氏、ジョン ポーター氏、
ケーオキッサダン パッチャラポーン氏(東京外国語大学)日本

●8月25日(木)東京外国語大学国際日本研究センター
国際日本語教育部門主催
文法・語用と教育シリーズ 第5回研究会
城戸寿美子氏(ベルリン自由大学)、望月圭子氏(東京外国語大学)

■会議歴■

●センター会議:　2016年 3月10日、4月14日、6月9日、7月7日

■ Lectures and Workshops ■

●Tue. 1 Mar.: Report "Japanese Education in China: Basic Japanese Education at Preparatory Schools for Chinese Students to Japan"

by Atsushi AKAGIRI(Kyoto Reigaku International Academy)
Mika SUZUKI(TUFS)

●Sat. 5 Mar.: ICJS "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 18th Research Seminar

hosted by the Contrastive Japanese Division, International Centre for Japanese Studies

by Michinori SHIMOJI(Kyushu University) Kazuyuki URATA, kensaku MAMIYA(TUFS)

●Tue. 31 May.: ICJS International Workshop
"The Individual, the State, and the Industry: Discourses in Theatre and Film in the Fifteen Years War"

by Iris HAUKAMP (SOAS; CAAS Visiting Researcher at TUFS), Takayuki KAN(Critics, Baiko Gakuin University)

●Sat. 9 Jul.: ICJS "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 19th Research Seminar

hosted by the Contrastive Japanese Division, International Centre for Japanese Studies

by Tomoaki SEINO (CHIBA UNIVERSITY) ,
Ryuko Taniguchi, Masashi NEGISHI (TUFS)

●Tuesday-Thursday, 19-21 July.: Summer Seminar 2016
"Language, Literature, History: Constructive Approach to International Japanese Studies"

by XU Yi Ping (Beijing Foreign Studies University)
FAN Shu Wen (Taiwan University)
HSU Hsiang Shen (National Chengchi University)
HSIAO Hsing Chun (Tunghai University)
KIM Jong Duck (Hankuk University of Foreign Studies)
YOUN Ho Sook (Cyber Hankuk University of Foreign Studies)
IH Ki Lyong (Chung-Ang University)
LIM Benchoo (National University of Singapore)
Tasanee METHAPISIT (Thammasat University)
Megumi SAKAMOTO, Syoji SHIBATA, John Patrick Porter, KAEWKITSADANG Patcharaporn(TUFS)

*Associated event Summer School 2016
"Postgraduate Students' Workshop in Japanese Studies"

●Thursday, 25 Aug. .: The 5th Research Seminar
"Grammar, Pragmatics, Education series"

hosted by the International Japanese Education Division, International Center for Japanese Studies

by Sumiko KIDO(Free University of Berlin)、Keiko MOCHIZUKI (TUFS)

■ Meetings ■

● Center meetings: 2016 -10 Mar., 14 Apr., 9 Jun, 7 Jul.

■今後の活動予定■

●10月20日(木) 国際日本研究センター主催
比較日本文化部門　報告会
「アルゼンチンにおける日本意識の変化」
アルゼンチンからの留学生と若手研究者

●10月～2月　国際日本学研究院主催　総合文化研究所共催
連続講演会「国際日本研究の現在—文学・文化・社会」

10月24日(月)リービ英雄11月12日(土)クリストファーガータイス(ロンドン大学SOAS、東京外国語大学特別招へい教授)、12月10日(土)井上章一(国際日本文化研究センター)　他　全9回連続講座(詳細は本学HPをご覧ください)

●12月17日(土)　国際日本研究センター 対照日本語部門主催
『外国語と日本語との対照言語学的研究』第20回研究会

●2月11日(土)国際日本学研究院主催　総合文化研究所共催
生誕150周年記念　漱石／子規シンポジウム「言葉、物、世界」

■Future Events■

●Thu. 20 Oct. Seminar "Change of the image toward Japan in Argentina" hosted by Comparative Japanese Culture Division at International Center for Japanese Studies
Presentation: exchange students and young researchers from Argentina

●Oct.～Feb. Lecture Series "Japan Studies Today - Literature, Culture, Society "

Mon. 24 Oct. Hideo LEVY, Sat. 12 Nov. Christopher Gerteis (SOAS, Tufs Special Visiting Professor), Sat. 10 Dec. Shoichi INOUE (International Research Center for Japanese Studies) etc. Total 9 lectures (For further details please refer to the TUFS website)

●Sat. 17 Dec. ICJS "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 20th Research Seminar hosted by the Contrastive Japanese Division, International Centre for Japanese Studies"

●Sat. 11 Feb. 150th Birthday Commemoration
Sōseki/Shiki Symposium "Words, Things, the World"

スティーヴン・ドッド(ロンドン大学SOAS)、王志松(北京師範大学)、柴田勝二(東京外国語大学)、村尾誠一(東京外国語大学)、菅長理恵(東京外国語大学)

●3月 4日(土) 国際日本研究センター 対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第21回研究会

Stephen DODD(SOAS), Zhisong WANG(Beijing Normal University), Shoji SHIBATA(TUFS), Seiichi MURAO(TUFS), Rie SUGANAGA(TUFS)

●Sat. 4 Mar. ICJS "Contrastive Study for Japanese and Other Languages" The 21st Research Seminar hosted by the Contrastive Japanese Division, International Centre for Japanese Studies"

お知らせ

国際日本研究センターデータサイトでは以下のデータベースを公開しています。国際日本研究センターのホームページから閲覧することができます。

http://ngc2068.tufs.ac.jp/icjs/htdocs/?page_id=13

1. 日本語教育事情

世界各国の日本語・日本学日本研究を専攻する課程を持っている大学を中心に日本語教育、そして幅広く日本研究に関する調査を行ってきた成果を公表しています。各大学の正式名称ほか、日本語学科あるいはその関連学科、大学院の日本研究関連コースについて、その組織、必修科目、使用教科書、コースの特徴、卒業生の進路など、また、日本留学に関する情報などを載せています。掲載大学は現時点で本学との交流協定校を中心に、アジア 41 大学、ヨーロッパ 18 大学、アメリカ 10 大学、アフリカ 2 大学、オセアニア 3 大学、NIS 諸国 5 大学と、計 79 大学に上っています。順次追加、情報の更新をしています。

2. 日本語と各国語の対照研究文献データ

5 カ国語と日本語の対照研究の論文、書籍の情報を掲載しています。英語 123 文献、ドイツ語 428 文献、朝鮮語 598 文献、ポルトガル語 27 文献、スペイン語 824 文献にのぼります。

3. 社会言語学基礎文献データ

社会言語学をこれから勉強しようという学部生を主対象に入門書を中心としたデータベースを作成しました。書籍を中心に 311 冊の情報が掲載されています。

『日本をたどりなおす 29 の方法－国際日本研究入門』

国際日本研究センターでは東京外国語大学出版会より 2016 年 3 月に国際日本研究センター編著『日本をたどりなおす 29 の方法－国際日本研究入門』を出版しました。本書は国際日本研究、上級日本語学習のための新しい教科書で、センター教員を中心に執筆し、日本語教科書としても使えるように問題やタスクを整備したものです。センターが総力をあげて作成したもので、現在の国際日本研究の最前線がうかがえるものとなっています。

現在追加の資料として、本文すべてを音読した音声を準備しており、ホームページからダウンロードできるようになります(本年 11 月から)。また今後追加資料などもホームページで提供していく予定です。

NOTICE

The International Center for Japanese Studies (ICJS) has published the following databases on its data page. They can be accessed from the ICJS homepage.

http://ngc2068.tufs.ac.jp/icjs/htdocs/?page_id=13

1. Japanese Language Education

Here are published the results of surveys on Japanese language education and a wide range of Japan research, with a focus on universities worldwide offering specialized programs in Japanese and/or Japan studies. In addition to the official name of each institution, information is provided about the Japanese program, related programs and postgraduate courses related to Japan research, including their structure, compulsory modules, textbooks, course features, career paths of graduates and details about study abroad in Japan. There are currently a total of 79 universities listed, mainly including TUFS partner institutions. They include 41 universities in Asia, 18 universities in Europe, 10 universities in America, 2 universities in Africa, 3 universities in Oceania and 5 universities in the New Independent States. Information is added and updated sequentially.

2. Bibliography of Contrastive Research into Japanese and Other Languages

Information on academic papers and books on contrastive research into Japanese and a total of five other languages is listed here. There are 123 items relating to English, 428 for German, 598 for Korean, 27 for Portuguese and 824 for Spanish.

3. Basic Bibliography for Socio-Linguistics

We have created a database of 311 introductory publications, chiefly books, aimed principally at undergraduate students looking to begin studying socio-linguistics.

"29 Ways to Travel back Japan – An Introduction to Japan Studies"

In March 2016 ICJS edited and published "29 Ways to Travel back Japan – An Introduction to Japan Studies" through Tokyo University of Foreign Studies Press. The text is a new textbook for Japan studies and advanced Japanese language studies. It was written chiefly by members of teaching staff at the Center, and includes exercises and tasks to enable it to be used as a Japanese language textbook. Produced though the combined efforts of the Center, it offers a glimpse into the current forefront of international Japan studies.

We are in the process of preparing recordings of the whole content of the text to be used as additional materials, which will be available to download from the Center homepage (available from November this year). Going forward, we are looking to provide further materials on the Center homepage.

発行 東京外国語大学国際日本研究センター 〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1アゴラ・グローバル 2F
TEL 042-330-5794 E-mail info-icjs@tufs.ac.jp URL http://www.tufs.ac.jp/common/icjs

「日本人の宗教観」「日本国憲法」「3.11 後の暮らし」など、多様な視点で描く「日本」。
海外でもとくに関心の高い 29 のテーマ、トピックを通して、読者一人一人に、
あらためて「日本」について考えを巡らせてほしい。

国際日本研究、上級日本語学習のための新しい教科書

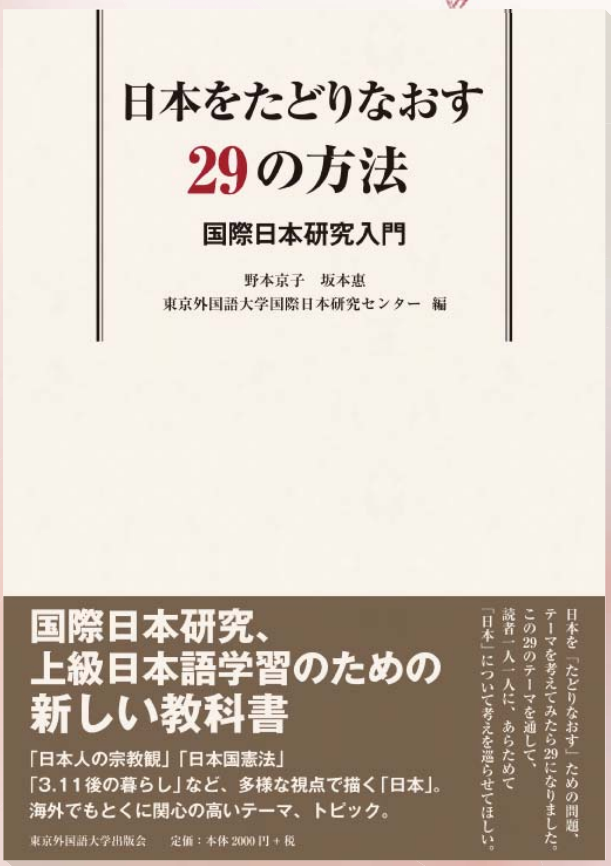
日本語を母語としない方々を最初の読者対象として、日本語を母語とする方々にも、自らの足元である日本について考え、「日本をたどりなおす」ために読んでいただきたいと思います。日本語を学習すると同時に、国際日本研究の入り口に立てるようにと意図されたものです。クラスで学習する場合は、テーマについて積極的に議論しましょう。

3 月 31 日発売

日本をたどりなおす 29の方法

国際日本研究入門

野本京子　坂本惠
東京外国語大学国際日本研究センター【編】



本書の構成（目次より）

第 1 章　日本語ってどんな言葉？
第 2 章　人間と文学を語る
第 3 章　ニホンのブンカ系
第 4 章　日本の中のいろいろなコトバ
第 5 章　戦後日本の枠組み
第 6 章　現代日本の暮らしと文化

- 日本国内の日本語上級レベルの留学生、海外の日本・日本語学科の教材として
- 日本語中上級、上級者向けの読解、精読の教材として
- 日本語母語話者を対象に教養レベルの「国際日本研究入門」の授業に

B5 判・並製・192 頁・定価：本体 2000 円＋税
ISBN978-4-904575-56-7 C0081

東京外国語大学国際日本研究センターについて

東京外国語大学国際日本研究センターは 2009 年 4 月に設立され、日本語教育の方法や日本の文化・社会に関する研究分野にかかわるテーマについて調査研究し、その成果を教育面にも反映・還元していくことを目標としています。留学生日本語教育センター、そして学部・大学院で日本語を含む 27 専攻語・地域についての教育研究体制を擁する東京外国語大学での日本語・日本研究は、「日本」をベースとしつつ、世界の諸言語・諸地域との比較研究をつよく意識せざるを得ません。このような恵まれた環境を最大限に活かし、海外の研究者との情報ネットワークを構築し、国内外における日本語・日本教育研究機関と連携しつつ、多様化する日本語学習者に対応した教育研究を進め、その成果をひろく社会に還元してまいります。

東京外国語大学出版会
Tokyo University of Foreign Studies Press
発行：東京外国語大学出版会
TEL. 042-330-5559　FAX. 042-330-5199

＊ご注文・ご予約は、最寄りの書店、各ネット書店にてお申し込みください。全国の書店でお取り扱い可能です。